

りの支持されて居る所以は、人民共の共通の利益だからと云ふ訳でなく、権力と云ふものがあるからだ。政府は人民がいやだと云ふことを強制して行はしめることも出来る。

斯様に違つた仕組を同じもののやうに云ふのは、實に馬鹿氣なことだ。

自由組織に於ては、お互が提議はする。そして其提議の行はれるのは、各個人がその提議に同意するからで、強制のためではない。

九 働かない人があつたら何うするか。

この問題は多くの人々から能く提出される問題だ。之れは人間は社會的動物である、云ふことを念頭において考へれば、すぐ了解が出来る問題だ。

社會は人間よりも先在者で、人間が未だ人間にならない以前から、社會を爲して生活して居た。だから人間と生れれば、必ず社會を爲して生活する。人間は社

會的動物だ、とは是所だ。

人間が皆仲好く働いて、共存共榮の生活を遂つて居るのに、自分のみ獨り理由なしに除け者になつて居りたがるものがあるとは思はれぬ。若しそう云ふ者があるとすれば、それは人間でない、非社會的動物であらう。

斯様な問題を提出する人々は、この有りやうのない人間を、自分の頭の中で想像したものであらう。だが萬が一、この有りやうもない問題——こんな想像的難問題は未だ會て人間社會に事實として現はれた例がないそうだが——が現はれたとすれば、自由社會においても困り者であるに相違なからうが、同時に、如何なる社會制度に於ても同じく困り者であらう。だから、之れは強ち自由社會にのみ提出さるべき問題でなく、全ての社會組織の下にも提出さるべき問題であらう。

それ故に、こんな有りやうもない想像的難問題の解決に困るから、と云ふので自由社會が悪い、と云ふ理由にならなう。

以上の如くに言つてしまへば、何んでもなく解決されてしまうのであるが、この問題を提出する人々の心の裡には、明かに、何等かの手段方法で人間に労働を強制しやうとする魂膽が伏在して居るのだ。換言すれば、自分達は支配階級、搾取階級として、労働階級を何時までも、支配し、搾取して居やうとの見が能く現はれて居るのだ。

働くと云ふことが、自分達の生のためでなく、他人の爲めに働かせらるゝ奴隷的労働である社会組織の下に於ては、労働は云ふまでもなく苦痛であらう。従つて誰れしも労働はいやに違ひない。それ故に人間を奴隷にして置かうとするもの共に取りては、労働を強制するだけの方法手段が必要となるのである。

けれども、人間が人間として生を享樂し得る自由社会に於ては、労働は最早や苦痛でない、否寧ろ、快樂であらう。

人間が社会をなして生活する、と云ふことは、社会に於て働いて生活する、と

云ふことで、絶えず働くのが人生の法則だ。それ故に、何人にも働かなくも宜しい、と云ふやうな特権の地位が許さるべき筈がない。

無政府主義に對して向けられたこの議論は、却て反對に、無政府主義に取りて都合の好い議論となる。人と生れて、働く必要のない特権の地位を保護するところの法律は悪い法律である。斯る制度は悪い制度である。

無政府主義は斯様な悪い法律、斯様な悪い制度を地上から排除してしまひ、そして、働かないところの人々を除去する唯一の制度なのだ。

十 競争を廢することは、働く朝戟をなくすることだ。

今日の社会に於て最も不可思議なことは、餘分な富と贅澤品とを生産するには驚くべき力を示してゐるが、しかも、最も緊要な必需品を生産する力の缺けて居ることだ。

このことは、其の政治的、宗教的、乃至は社會的意見がどうあらうと、そんなことには拘はりなく、皆な一樣に同意することだらう。それは餘りに明瞭な事實であるから。

一方に於ては、履物屋は品物が賣れなくて困まるとこぼしてゐるかと思へば、他方に於ては履物を持つてゐない兒童は、町に村に夥しくあるのだ。

一方に於ては、最も肝要な食物さへも得られないで、飢ゑたり死んだりする人間のあるのに、他方に於ては、食物商人は品物が出ないと泣き事を言つて居る。

觀音様の椽の下や、公園のベンチや、道ばたに寝て居る住家のない男や女があれば、又夜中家がなないので歩きとほして居る者もあるに拘らず、そこには又家主は借人が來なくて困ると言つてこぼしてゐる。

總て、斯様な場合には、賣れない、借人がない、即ち、需用者がないからと云ふので生産は止められる。家のないもの、履物や食物の必要なものは澤山居る。

しかも、其の仕事を止める、其の生産を停止する。

これが今日の有様だ。人間が餓ゑて居る、凍えて居る、そして住家がない、これほど仕事をせねばならぬ刺戟はない筈だ。然るに之れは刺戟になつて居らぬのだ。パンと着物と住家が必要であるのに、しかも絹やダイヤモンドそして軍艦などを作るやうに、人間をすることで刺戟は、全然間違つた悪いものだ。

今日、人々が仕事をしようとして焦せる刺戟は最大な利益を得やう、儲けやうとして競争するのだ。飢に泣いて居る兒等を養ふために生産しても儲けがない、それよりも貴婦人達の氣まぐれの慾望を満足させるために、贅澤品を生産する方が何れほど儲けがあるか知れない。それで、人々は兒供のものなどはそれなりに打ち捨て、置か、僅かな冷たい慈善にまかせるか、關の山で、しかも、貴婦人達のものをは夢中になつて、競争して生産するのだ。

之れが、競争なるものの何んであるかを語るものだ。

抑も、生産者と消費者とは社會の二つの重なる組成要素だ。富の絶えざる流れはこの一方から他方に流れて居るが、其の間に金儲けをするものと、其者共の競争の制度とが介在して居つて、其者は自分の思ひ通りに、其の流れをば方向を變へる事が出来る。こうすれば儲けが多い、あくすれば、あまり儲けがないとか、自分の思ふ最もいゝやうに富の流れをば仕向けるのだ。

こうした悪制度があるから人間に必要なものが産出されないで、不必要なもののみが産出される事になる。こんな奴等を掃滅することだ。そして生産者と消費者との關係をお互の直接關係にするのだ。

中間に入つて金儲けするものと、其の競争の制度とがなくなつた時に、そこに本當の人間に必要なものを生産せねばならない、と云ふ有要な刺戟が残存する。生活必需品及び高尚な贅澤品の必要と云ふことは、今日のやうに基礎的の必需品であるばかりでなく、有ゆる生産と分配の直接原動力なること勿論だ。

生産と分配とが、人民の必要を満足させることのみに行はれて、決して他の理由で行はれないやうな状態が、目的であり、目的とされるべき理想的のものであると考へる。

十一 犯罪者は何うするか。

この問題に答へるに當りて、先づ第一に尋ねたいことは、何んなものが犯罪であるか、そして又何人が犯罪者を決定するかと云ふことだ。

自由社會に於ては、生活は自由である。人々皆な其の所を得て居る。どんなものが犯罪であらうか。泥棒、人殺し、詐欺、横領、それらのものは自由社會には消えてない。

それがあると思ふのは、尙ほ自由社會に於て働かぬものがあつたらば、と云ふ問題と同じやうに、あるべからざる問題を有りと想像しての問題と同様だ。

今日、支配階級の徒は云ふ。法律と權力とがあつてお前達の生命財産を、保護しなければ、お前達は生命も財産も維持することは出来ない、と。

しかも、彼等は、金持階級が、貧乏人共の生産した富と贅沢品とを所有し、法律の名の下に大儲けをした盗奪の結果を保護するやうに、要求して居るのだ。

そこで、自分達が生産したものの大部分を法律の名の下に持つて行かれ、自分の手許には、泥棒に盗まれるやうなものを持たぬ貧乏人共に取りては、彼等から取ることの出来ない泥棒と、彼等が生産したものを大部分持つて行つて了ふ金持共を保護する法律とを天秤にかける氣にならしめる。

今日のやうな悪い世の中でさへ、大多数の犯罪は人民に対しては、そんなに恐ろしい結果をば與へてゐない。人民共に取りて大損害大残害となるものは、彼等の生産したものの大部分を取り去つて行くもの、彼等から生活の必需品を奪ひ去る者共だ。

彼等は今其者共との戦ひを苦い苦い戦ひをして居るのだ。

自由社會に於ては、こんな悪い制度は廢止されて、人々は相倚り相扶けて自由、平等、友愛の生活をなすことが出来る。今日の所謂犯罪の起るべき原因は消えてない。然るに、現在の制度の下に於ては、犯罪は増へる一方だ。犯罪は新しいもの、新しいものと出て來るばかりだ。

盜賊が横行する、彼等は警察の無能を罵る。新しい犯罪が現はれて、法律が不備だと騒ぐ。けれどもどれほど警察制度を完備させやうと法律の網を密にしやうと、犯罪の起るべき原因のある以上は、犯罪は現はれるのだ。警察の罪でも法律の罪でもないのだから仕方がない。

然るに、犯罪を以て、警察の無能と、法律の不備に歸する人々に取りては、警察のない、法律のない、自由社會に犯罪があつて困るだらうと思ふのは、無理でもなかりそうだ。斯様な頓馬な人間に取りては。

だけれども、知らねばならぬことは、病源を極めないで、ただ其の病の現はれた所に、膏藥をはつたり、そこを切開したとて病は根治するものでない。そして膏藥のはりやうが足りないとか云つて膏藥攻め、切開せぬにしたならば、其者は死んで了ふ。

それと同様に、警察が不備だ、法律が不足だと、法律攻め、警察攻めにしたならば、其の國は滅亡するより外に道がない。昔から斯うして多くの國々は亡んで來た。

私達は祖先の國を亡ぼしてはならない。私達は犯罪の源を清めることをしなくてはならぬ。

和田久太郎稿

獄窓から

定價一圓五十錢
書留送料十八錢

同志和田君が、福田大將狙撃事件の被告として市谷刑務所の未決監にゐた時に書いた、隨筆、感想、俳句、短歌、及び同志友人に宛てた百餘通の書簡を蒐めたものだ。社會運動者としての彼の面目、久太といふ多角的な人間の各方面は、遺憾なく本書に語られてゐる。同志諸君よ、勇敢な實行家であつた彼が、腹の底をさらけ出して書いた本書を見てくれ！ (菊半截版布装・四百二十頁)

發行所

東京本郷駒込片町十五
振替東京五一三六〇番

労働運動社

革命の硏究

著者 キトボロク大
譯者 榮杉

我々は先づ、本當の革命家と、今は我々の味方だと云つてゐるがやがて我々の敵になるだらう者共とを、豫めよく區別して置く必要がある。クロボトキンは、主としてフランス革命の事實に基いて之れを説いてゐる。革命の時に、どんな奴がどんな事をするかは、だまされまいと思ふ労働者のよく知つてゐなければならん事だ。

定價 一部十錢・送料二錢

東 京 振 替 東 京 振 替
〇 六 三 一 五 〇 六 三 一 五
社 動 運 働 勞 社 動 運 働 勞
郷 町 本 片 郷 町 本 片

青年に訴ふ

著者 キトボロク大
譯者 榮杉

クロボトキンは火の如き熱心を以て眞理と正義と自由とを愛する青年の誠心に訴へてゐる。

本書は、クロボトキン自身も云つてゐる如く、クロの最もお得意のものである。そして二十餘りの諸外國語に翻譯されて、クロの著書の中でも最も廣く讀まれてゐる。資本主義制度の鐵鎖に縛られた労働階級の諸君は、而も社會解放の事業を急ぎつつある諸君は、本書を讀んで全身の血がはねかへるのを覺えるであらう。

定價 一部十錢・送料二錢

東 京 振 替 東 京 振 替
〇 六 三 一 五 〇 六 三 一 五
社 動 運 働 勞 社 動 運 働 勞
郷 町 本 片 郷 町 本 片

無政府主義研究雜誌

月刊 勞働運動

定價一部二十錢
半年一圓二十錢

このパンフレットを讀まるる諸君は、

同時に我々の機關誌たる本誌の購讀を

希ふ。

發行所

東京本郷駒込片町十五
振替東京五一三六〇番

勞働運動社

昭和二年六月二十七日印刷
昭和二年七月一日發行

【定價十錢】

著 者 岩 佐 作 太 郎

發 行 所 東京市本郷區駒込片町一五

仲 副 人 近 藤 憲 二

東京市神田區今川小路一ノ一

同 工 社

發 行 所 東京市本郷區駒込片町十五

勞 働 運 動 社

振替東京五一三六〇番

岩佐老人のこの本が複製版になるが、今更らのように年月の速さがおもわれる。

大杉からの話で連載した「労働運動」が何号であるかは調べると分ることだが、パンフレットにして市販したのが昭和二年七月で、大正天皇死去の直後だったためもあつて内務省の検閲が、時機をわきまえぬ不とき者と、ひどい削除され方であつた。

ところが、どうして残っていたのか思い出せないが、削除箇所を指定された朱入りの校了直前のゲラ刷が手許にあるのを大島君に見せたところ、複製版を作りたいと言う。というわけで、この複製版でふりがなのないところがその部分である。

現代風の分りやすい言葉や仮名にして作り代えるのもよいが、こうした昔風のルビ付旧かなを読み返して見て、これも時代を知るよすがともなろう。雪の夜に数人のものでかかれるようにして聞いた丁度この本の内容そっくりの門答とクロボトキンの「パン略」やフランス革命の話が想い出され、昭和三十五年頃撮つた写真を入れてもらうことにした。

(昭和四十七年十一月一日 古川時雄)

革命の歌 (改訂)

ああ革命は近づいた。ああ革命は近づいた。
起てよ、すべての人々よ、目ざめよ兄弟姉妹たち。
見ろ、わが自由の楽園を、ふみにじつたは何者だ。
見ろ、わが正義と平等をふみつぶしたは何やつだ。
支配と搾取、迫害に、われらいつまで屈しよう。わが脈々の熱血は、あくまで自由を要求す。
われらに自由なかつたら、むしろ墓場を選擇うと、わが人類は万国に絶叫しつゝ戦闘す。

春らんまんの花さえも、権力者どものために咲き
秋れいろうの月さえも、資本家地主のために照る。
わが同胞は戦争に、やつらのために殺された。老いた人はいたましく、
やつらのために死に去つた。若い男女の青春もやつらのために奪われる。

ああ長年のこの怨み、どうして報いずおくものか。
われらは少く弱くとも、自由連合の力あり。

ああ起て、君よ、革命は、われらの前に近づいた。農夫はスキ・クワ取つて起て、
工夫はツルハシ取つて起て。木こりはオノを取つて起て。
森も林も武装しろ。石は何ゆゑ飛ばないか。マイトは何を爆破する。

われらの熱血くだつては、やがて染めなす黒旗を、高くかかげて圧制に、反逆すべく決起しろ。

ああ革命は近づいた。ああ革命は近づいた。
起てよ、すべての人々よ、目ざめよ兄弟姉妹たち。

人類更生の大道、無政府主義研究書。送料当方もち

八太舟三者

○ 純正無政府主義（農村社会革命講座）

階級闘争説の誤謬

無政府主義とサンジカリズム

マラテスタ著

○ 無政府主義組織論

○ 選挙戦に際して——付略伝——

○ 農民の中へ

石川三四郎著

マフノの農民運動

弁証法的唯物史観の批評

進化と革命（ルクリエ著）

○ 無政府主義とサンジカリズム

○ 平民の鐘——無政府の福音——

岩佐作太郎著

○ 革命思想

石川三四郎ほか三氏著

○ 日本無政府主義運動史 第一編

近刊

権藤成卿著作集2農村自救論、3君民共治論、4自治民政理、5日本農制史談（発禁）、血盟団、五・一五、二・二六七の後にくるもの、パンフ等、6南湖書、柳子新論、7八郷通聘政、8日本震災凶難政、9問々子詩、10補遺

発行所

黒色戦線社
〒三七二 群馬県伊勢崎市中町和田 大島英三郎方
振替字都宮 一一〇一五 大島英三郎

大杉・朴烈ら十二氏著

○ 叛逆者の牢獄手記

和田久太郎著

○ 獄窓から 増補版

古田大次郎著

○ 死刑囚の思い出 増補版

天皇制破壊への高動

○ 一・二皇居発煙筒事件 訴訟記録

○ 壇谷雄高氏の天皇制批判の証言収載

雑誌労働運動（大正十三年三月号）

○ 大杉栄・伊藤野枝・追悼号

○ 大杉栄・望月桂・共著

○ 漫文・漫画

権藤成卿著作集第一巻

○ 自治民範

黒色戦線社編集

○ 難波大助大逆事件——虎ノ門で現天皇を狙撃——

○ クロボトキン著 麻生義訳

○ 正義と道徳

○ 金子ふみ子獄中手記何が私をこうさせたか 跋・壇谷雄高

付ふみ子歌集・大逆事件資料

二〇〇円

八〇〇円

七〇〇円

三〇〇円

一〇〇円

一五〇円

二〇〇円

一五〇円

一九七三年一月 発行

定価 一五〇円

発行所

群馬県伊勢崎市中町和田 大島英三郎方

黒色戦線社

振替字都宮 一一〇一五

発売書店

東京・神田ウニタ、神田・書泉グランデ、書泉ブックマート、吉祥寺ウニタ、新宿模索舎、駒場・コマバ、渋谷・大盛堂、国分寺アウアン、池袋・芳林堂、早稲田・文献堂、谷、寅、川崎・甘露、横浜ルビコン、大坂、曾根崎、京都・三月、ふたば、京都、神戸イカロス、仙台、八重洲、萩、札幌アテネ、福岡・源昌堂、前橋・煥乎堂、大盛堂、伊勢崎駅通り三光堂、名古屋ウニタ